様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ９ 月 １１ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０３１９５

研究課題名（和文）20世紀ドイツにおける総力戦と社会国家の生成―女性の社会活動と福祉の国家化

研究課題名（英文）Total War and the Emergence of the Social State in twentieth century Germany - Social Work of Women and Nationalization of Welfare

研究代表者
北村　陽子（Kitamura, Yoko）

名古屋大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：１０５３３１５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究課題は、女性の社会活動（ソーシャルワーク）が福祉国家形成に果たした役割を検証するものである。20世紀前半の女性たちの社会活動は、ドイツはもとよりヨーロッパ全体においても、困窮する人びとに対する援助を中心とする。世界大戦によって、資金や人的資源の面で女性の社会活動は国家レベルでの支援との協働が不可欠となったため、戦後のドイツおよびヨーロッパの国々は、必然的に国家が困窮者支援を主導する福祉国家にならざるを得なかった。戦時下の女性の社会活動は、国家による福祉政策主導に先立つ援助システムであり、また国家の支援を補完する重要な役割を担うものであったことを、本研究を通して明らかにできたと考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究課題は、社会国家（福祉国家）の生成の過程における女性のソーシャルワークの寄与という、公的支援システムに民間の援助がどう関与したかを明らかにした。この成果は、福祉国家生成をめぐる議論において、公私協働ネットワーク論の重要性を強調するものである。本研究課題の成果は、福祉の民営化を進める21世紀の日本の姿勢とは逆に、公的支援の枠外にいる要救護者への支援を民間の援助によって補完するシステムが、戦争という大きな社会的混乱に対処するのに適していることを示した。感染症対策が急務の現在、戦争と同様に社会の混乱が著しいなか、公的支援を中心にすることで人びとの安寧が守れることを提示したのである。

研究成果の概要（英文）：　This survey aims to verify the role of women’s social work in the emergence of welfare state in the first half of the twentieth century. Women’s social work in Germany and in Europe generally directed toward people in need. In the lack of funds and manpower, the women’s social work in Germany and in other European countries had to rely on the state support system after the World War II, hence the state led mainly the support system for needy nation. In this survey, I proved that women’s social work in wartime Germany was certainly the pathfinder for the state welfare politics and complemented the national help service in post-war period.

研究分野：西洋史

キーワード：世界大戦　ドイツ史　社会国家　社会政策

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

第一次世界大戦期の戦没兵士遺族の支援に関しては、ウォーレンの研究①を端緒として、クンドゥルスの比較史②、クールマンの分析③と徐々に研究が進められてきている。いずれにおいても、戦時期およびその後の遺族たち、とりわけ戦没兵士の寡婦に対しては、就労して自立につなげる方針での支援が第一の柱であった。それ以外の生活支援についても、個別自治体において行政と民間慈善団体、とくに女性団体が協働する戦時扶助の枠内でさまざまなサーヴィスが手供された。第一次世界大戦後には大量の戦争障害者や戦没兵士遺族を支援するため、1920 年に国家による援護が制度化されている。また祖国前線や前線での女性の位置づけをまとめた論文集④は、両次世界大戦期の女性たちの社会活動、労働、ときに前線での活動を取り上げて、戦争と女性の関係性を包括的に描き出し、戦間期には女性の社会活動が公的社会政策を補完したことが指摘されている。

ナチ期の一般の女性たちの姿に焦点を当てたメイソンの研究⑤と、第二次世界大戦期の女性たちの戦時活動を分析したクラーマーのモノグラフ⑥から、女性による戦時下の社会活動が、第一次世界大戦期の活動をふまえた上で、ナチ党のイデオロギーの制約下でも多様であったことが示されている。個々の女性たちの戦時期の生活の様子を聞き取りした⑦や⑧からも、女性たちが相互に支えあった様子が見て取れる。第二次世界大戦後の西ドイツでは、シュネーデルブッシュ⑨が示したように、戦間期以上に女性の社会活動が公的社会生活を補完して人々の生活を支えていた。

① Whalen, Robert Weldon, *Bitter Wounds. German Victims of the Great war, 1914-1939*, Ithaca/London 1984.
② Kundrus, Birthe, *Kriegerfrauen. Familienpolitik und Geschlechterverhältnisse im Ersten und Zweiten Weltkrieg*, Hamburg 1995.
③ Kuhlman, Erika, *Of little comfort. War widows, fallen soldiers, and the remaking of the nation after the Great War*, New York 2012.
④ Hagemann, Karen / Schpler.Springorum, Stefanie (Hg.), *Heimat-Front. Militär und Geschlechterverhältnisse im Zeitalter der Weltkriege*, München 2002.
⑤ Mason, Tim, Zur Lage der Frauen in Deutschland 1930 bis 1940. Wohlfahrt, Arbeit und Familie, in: *Gesellschaft*, H. 6 (1976), S. 118-193.
⑥ Kramer, Nicole, *Volksgenossinen an der Heimatfront*, Göttingen 2011.
⑦ Szepansky, Gerda (Hg.), *Blitzmädel, Heldenmutter, Kriegerwitwe. Frauenleben im Zweiten Weltkrieg*, Frankfurt am Main 1986.
⑧ Dörr, Margarete (Hg.), *Wer die Zeit nicht miterlebt hat. Frauenerfahrungen im Zweiten Weltkrieg und in den Jahren danach*, 3 Bde., Frankfurt am Main 1998 (2. Aufl. 2008).
⑨ Schnädelbusch, Anna, *Kriegerwitwen. Lebensbewältigung zwischen Arbeit und Familie in Westdeutschland nach 1945*, Frankfurt am Main / New York 2009.

２．研究の目的

本研究は、20 世紀ドイツにおいて二つの世界大戦期に兵士遺家族支援を担った女性たちによる戦時下の社会活動（ソーシャルワーク）が、女性たちの職域を広げ、また女性たちの自立意識を助けたこと、それによって戦後に家族関係の変化をうながし、公的支援のあり方を変えていった過程を明らかにすることをめざす。その際、女性の社会進出が行政分野にまで及んだ点と社会活動に国家資格が導入された点を考慮し、ドイツにおける社会国家の形成に女性たちが果たした役割とその影響力の大きさについても分析し、社会国家のジェンダー史を構築することも、合わせて目的とする。

３．研究の方法

本研究では、分析対象と同時代の史資料、とくに同時代の女性雑誌や戦争犠牲者団体の発行した雑誌を利用することにより、平時あるいは戦時の女性の社会活動の具体的な事例を丁寧に追っていく。ただしナチ期のものは、党のイデオロギーにそった「意見」のみが採用されるため、これらのほかに、戦後の個別インタビューなどを合わせて確認することが不可欠となる。公的な社会政策に関しては、労働省の報告、社会政策に取り組んだ団体の機関誌を丹念に読み込んで、現実の社会政策を根拠づける法令やそれにもとづく方策をさぐる。こうして得た知見を、ドイツ現代史研究会や比較家族史研究会など関心を同じくする研究者の集まる場で報告し、深化を図る。

史料調査は、兵士遺家族支援および女性の戦時期の社会活動については、全国レベルの変遷とともに、これまで事例研究として扱ったフランクフルト・アム・マインの事例を中心に調査する。その際には、市の文書館 Institut für Stadtgeschichte に所蔵されている救貧局、住宅局、労働

局、保健局、福祉局、扶助局など、窮乏者支援に関係する部局の行政史料のほか、市議会議事録や市参事会報告、統計を利用する。また都市自治体の制度改変に許可を与える上級官庁とのやり取りを確認する必要もあるため、ベルリンの連邦文書館 Bundesarchiv に所蔵されている内務省、軍司令部、ナチ党および党福祉団体の文書を閲覧する。さらにフライブルクの連邦軍事文書館 Militärarchiv では、軍事年金などの兵士遺家族支援関連の文書を閲覧する。

その他同時代文献に関しては、ドイツ国立図書館 Deutsche Nationalbibliothek のライプツィヒ館、ベルリンのプロイセン州立図書館 Staatsbibliothek zu Berlin に所蔵されている、ナチ戦争犠牲者組織の『ドイツ戦争犠牲者援護 Deutsche Kriegsopferversorgung』（1932/33-1944/45 年）、ナチ福祉組織 NSV の活動記録シリーズ Schriftenreihe der NSV、ナチ女性団の機関誌『ナチ女性展望 NS Frauenwarte』（1932/33-1944/45 年）などを閲覧し、関連する記事を確認する。

また、帝国労働局の『官報新シリーズ Reichsarbeitsblatt. Neue Folge』（1920－1945 年）は、戦争犠牲者援護に関する規定や手続きの変更を細かく報告するものである。またドイツ全体をカバーする民間の慈善団体「ドイツ公私扶助組織 Deutscher Verein für öffentliche und private Fürsorge」の機関誌『報告 Nachrichtendienst』（1920 年－現在）には、具体的な援護施策の例が掲載されている。その他、NSV による調査・報告シリーズ Schriftenreihe der NSV など同時代に発行された文献、フランクフルト新聞 Frankfurter Zeitung など当時の日刊紙についても調査を進める。これらは、慶應義塾大学、京都大学、東京大学、名古屋大学、立命館大学など国内の大学図書館にも所蔵されているため、適宜閲覧に赴き、必要な箇所を複写する。

４．研究成果

本研究は、二つの世界大戦期の前後を含めた 20 世紀ドイツにおいて、女性の社会活動が社会国家生成に与えた影響を通時的に確認することを目的としていた。従来のドイツ史研究は、第一次世界大戦より前の第二帝政期、戦時期、戦間期、ナチ期、第二次世界大戦期、そして戦後と研究テーマはほぼ戦争ごとに区切って扱われてきた。このような細切れの分析は、社会国家生成などより大きなテーマについては見通りを立てにくくなる。本研究はそうした時期区分を念頭に置きながらも、それらを通時的に議論できるような枠組みを考慮する姿勢をとった。

とりわけ極端なイデオロギーが社会を分断し、一部を殺害するに至るナチ期についても、それ以前から連続する社会活動もあり、また戦後に継続された施策もあったことは、すでに本研究以前に明らかにされている。本研究は、こうしたドイツ史の連続面に着目して、戦争と社会国家の生成の関係、それに女性が果たした役割を長期的に分析し総合することに注意して進めてきた。

その成果として、2017 年 10 月には政治経済学・経済史学会の 2017 年度秋季例会で、シンポジウム形式の共通論題「戦時社会問題の展開と帰結――食料危機・民族支配・社会関係の再編を中心に」の第一報告として「第二次世界大戦化の戦争犠牲者問題――フランクフルト・アム・マインを事例に」と題して報告した。ここでは第二次世界大戦期から戦後にかけての戦争犠牲者支援を、一つの都市に焦点を当てて検証することで、戦時から戦後の社会活動の連続面を明らかにした。

2018 年 9 月には日本独文学会秋季研究発表会で、シンポジウム「第一次世界大戦の諸相――個と全体の視点から――」で、「第一次世界大戦期ドイツにおける戦争犠牲者援護――寡婦への支援を中心に――」と題して、第一次世界大戦中の戦没兵士の寡婦支援を報告した。ここでは女性たちが同じ女性たちの生活支援のために行政に働きかけたり、個別の慈善活動を通して具体的な支援を行なったりした状況を明らかにし、戦争が女性の社会活動を活発にしたことを明示的に示した。2018 年 11 月には日本国際政治学会研究大会で、これもシンポジウム形式の分科会「ジェンダーⅡ　戦後を生きる人々とジェンダー」にパネリストとして参加し、「寡婦たちの戦争――第一次世界大戦期ドイツにおける戦争犠牲者援護――」というテーマで報告した。ここでは主として第一次世界大戦後からナチ期にかけての女性たちによる戦争犠牲者援護の事例を扱い、戦時期、戦間期、ナチ期の連続した社会活動の実態を明らかにした。

2019 年 6 月には、レーゲンスブルク大学歴史学部のリートケ教授が主催するコロキアムで、「Kriegsversehrtenversorgung in Deutschland in der ersten Hälfte des 20. Jahrhundert」（20 世紀前半ドイツにおける戦争障害者援護）について報告した。戦争によって傷病を負って除隊した戦争障害者たちが家庭生活に戻ったあとの生活支援をメインとした報告であるが、戦争障害者たちとその家族（主として妻や子ども）の関係に生じた心理的な乖離は、女性たちが第二帝政期から進めていた家族支援を通してある程度修正された事例など、社会国家生成と女性の社会生活に関連する指摘を含めたものである。

以上、本研究課題が措定した問いは、3 年間の調査・分析と、それらの成果をまとめた研究論文やその他の成果、口頭報告によって、じゅうぶん明らかにされたと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 北村陽子	４．巻 239
２．論文標題 第二次世界大戦下の戦争犠牲者問題――フランクフルト・アム・マインを事例に――	５．発行年 2018年
３．雑誌名 歴史と経済	６．最初と最後の頁 2-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 北村陽子	４．巻 6
２．論文標題 書評　石井香江著『電話交換手はなぜ「女の仕事」になったのか――技術とジェンダーの日独比較社会史』	５．発行年 2019年
３．雑誌名 女性とジェンダーの歴史	６．最初と最後の頁 99-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 北村陽子	４．巻 16
２．論文標題 第一次世界大戦後ドイツにおける戦争犠牲者援護――盲導犬の誕生――	５．発行年 2019年
３．雑誌名 パブリック・ヒストリー	６．最初と最後の頁 95-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 北村陽子	４．巻 53
２．論文標題 ドイツにおける世界大戦と福祉――盲導犬の発展の歴史――	５．発行年 2018年
３．雑誌名 軍事史学	６．最初と最後の頁 28-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 北村陽子	4．巻 965
2．論文標題 現代史部会 本岡拓哉 戦後都市,「不法占拠/居住」をめぐる空間の政治 宮田伊知郎 未来都市の米国現代史（2017年度歴史学研究会大会報告批判）	5．発行年 2017年
3．雑誌名 歴史学研究	6．最初と最後の頁 48-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 北村陽子	4．巻 264
2．論文標題 書評 高林陽展著『精神医療、脱施設化の起源 ： 英国の精神科医と専門職としての発展1890-1930』	5．発行年 2017年
3．雑誌名 西洋史学	6．最初と最後の頁 254-256
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 北村陽子	4．巻 139
2．論文標題 第一次世界大戦期ドイツにおける戦争犠牲者援護――寡婦への支援を中心に――	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本独文学会研究叢書	6．最初と最後の頁 45-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 北村陽子
2．発表標題 第一次世界大戦後ドイツにおける戦争犠牲者援護――盲導犬の誕生――
3．学会等名 第23回ワークショップ西洋史・大阪
4．発表年 2018年

１．発表者名 北村陽子
２．発表標題 第一次世界大戦期ドイツにおける戦争犠牲者援護――寡婦への支援を中心に――
３．学会等名 日本独文学会2018年秋季研究発表会
４．発表年 2018年

１．発表者名 北村陽子
２．発表標題 寡婦たちの戦争――第一次世界大戦期ドイツにおける戦争犠牲者援護――
３．学会等名 日本国際政治学会2018年度研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 北村陽子
２．発表標題 第二次世界大戦下の戦争犠牲者支援――フランクフルト・アム・マインを事例に――
３．学会等名 政治経済学・経済史学会　2017年度秋季学術大会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計2件

１．著者名 若尾祐司、木戸衛一	４．発行年 2017年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 380
３．書名 核開発時代の遺産	

１．著者名 タラ・ザーラ、三時眞貴子、北村陽子、岩下誠、江口布由子	４．発行年 2019年
２．出版社 みすず書房	５．総ページ数 488
３．書名 失われた子どもたち	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考